1998,10,15（オランダからの訪問団を迎えて）

スピーチ原稿（改訂版）

脇田孝豪（住吉高校社会科教員）

――

皆さん、こんにちは。住吉高校にようこそおいでくださいました。

５０数年前になりますが、1941年12月８日に、日本はアメリカ・イギリス、そしてオランダに宣戦布告して、「太平洋戦争」が勃発しました。
そして、1945年８月15日、連合国軍に無条件降伏して、第２次世界大戦および太平洋戦争は終了しました。

これらのことは、私もそうですが、多くの人々にとって、生まれる前の出来事であります。しかし、1985年５月８日に行われたドイツのヴァイツゼッカー大統領の演説は、現在の多くの日本人にも深い感銘と共感を与えました。彼はこのように演説しました。

「問題は過去を克服することではありません。さようなことができるわけはありません。
後になって過去を変えたり、起こらなかったことにするわけにはまいりません。しかし、過去に眼を閉ざす者は、結局のところ、現在にも盲目となります。非人間的な行為を心に刻もうとしない者は、そうした危険に陥りやすいのです。」

また、次のようにも、述べています。

「5月8日は心に刻む er-innerun 日であります。・・われわれは今日、戦いと暴力支配のなかで斃れたすべての人々を哀しみのうちに思い浮かべております。」

「しかしながら、故郷を追われ、隷属に陥った原因は、戦いが終わったところにあるのではありません。戦いが始まったところに、戦いへと通じていったあの暴力支配が開始されたところにこそ、その原因はあるのです。」

私たち日本人にとっての「5月8日」は、同じ1945年の「8月15日」であります。
連合国軍による占領下とはいえ、私たちの先輩たちは、日本軍による残虐行為や、日本政府の非人道的政策を支えていた「旧体制」を徹底的に見直し改革しようと図りました。
それらが法的レベルで結晶化したものが、添付しました「資料プリント」にある『日本国憲法』（1947年5月3日施行）であり、『教育基本法』（1947年3月31日施行）であります。

『日本国憲法』の前文で次のように表明し、これは、第9条「戦争の放棄（RENUNCIATION OF WAR)」の趣旨ともなっています。
「日本国民は、恒久の平和を念願し、人間相互の関係を支配する崇高な理想を深く自覚するのであって、平和を愛する諸国民の構成と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しようと決意した。われらは、平和を維持し、専制と隷従、圧迫と偏狭を地上から永遠に除去しようと努めている国際社会において、名誉ある地位を占めたいと思う。」
（We, the Japanese people, desire peace for all time and are deeply conscious of the high ideals controlling human relationship, and we have determined to preserve our security and existence, trusting in the justice and faith of the peace-loving peoples of the world. We desire to occupy an honored place in an international society striving for the preservation of peace, and the banishment of tyranny and slavery, oppression and intolerance for all time from the earth. ）

また、ほぼ同時に制定された『教育基本法』では、この新憲法を受けて、その「前文」で次のように述べています。
「われらは、さきに、日本国憲法を確定し、民主的で文化的な国家を建設して、世界の平和と人類の福祉に貢献しようとする決意を示した。この理想の実現は、根本において教育の力にまつべきものである。」

日本の学校教育は、この住吉高校もそうですが、『日本国憲法』および『教育基本法』の上記の精神を根幹にすえて、敗戦後50年余りの歳月の中で、「民主主義のための教育」「平和主義のための教育」「人権尊重のための教育」について、膨大なノウハウの蓄積をしてきました。
しかしながら、日本社会は敗戦時の廃墟の中から大きな経済発展を遂げるとともに、現在もそうですが、生活様式および生活意識の巨大な変容に見まわれてきました。

ヴァイツゼッカー大統領の演説にあるように、私たちは、けっして「過去に眼を閉ざす」べきではないと考えますが、私たちは「これからありうべき世界の巨大な変容」を前にして、「民主主義」「平和主義」「人権尊重」の精神を基底にしっかりと組み込んだ「新しい人類社会の形成」に向けて、「未来」をも照準に入れて積極的に取り組んでいくべきであると考えます。
「未来」とは何か？　それは、私たち教員にとって、具体的には何よりも、これからの人類社会の担い手となる「生徒たち」であります。

今日の皆さんの住吉高校へのご訪問は、先のヴァイツゼッカー大統領の言葉を借りますと、次のような意義をもっていると考えています。

① 私たちが、「過去」を「心に刻む erinerun」「ある出来事が自らの内面の一部となるよう、これを誠実かつ純粋に思い浮かべる gedenken」上で、貴重な出会いとなるであろうこと。

② 「歴史の真実」は、当事者の方々の視点や立場を踏まえることを抜きにしては、けっして「公平」ではありえないことは自明であります。したがって、今回の交流を通じて、「歴史の真実を冷静かつ公平に見つめることができるよう、若い人々の助力を」することができるのは確実であるということ。

③ 「故郷を追われ、隷属に陥った原因は、戦いが終わったところにあるのではありません。戦いが始まったところに、戦いへと通じていったあの暴力支配が開始されたところにこそ、その原因はあるのです。」
その「原因」を今後も「誠実に」追究していく力を生徒たちと私たち教員に与えられる絶好の機会となるであろうこと。

④ 生徒たちのみならず、私たち教員にとっても、もはやそのまま当てはまるのですが、「若い人たちにかつて起こったことの責任はありません。しかし、歴史のなかでそうした出来事から生じてきたことに対しては責任があります。」
これらの「責任」の所在についての気付きは、社会認識の深まりとともに、互いの人間性回復にとって確実な手掛かりともなるものであろうこと。

ところで、この「誠実」という言葉から、私は教員として、フランスの詩人ルイ・アラゴンの次の詩句を想起します。
「教えるとは（ともに）希望を語ること。学ぶとは誠実を胸に刻むこと。」

最後になってしまいましたが、今日の交流会の機会を作っていただきましたオランダからの訪問団の皆さんと、ご尽力いただきました関係の皆さんに、心から感謝申し上げます。